



地球

かがやけ地球 創刊100号記念!



創刊号



25号



39号



91号



50号



46号

ふじさわは変わった? 変わらない? ~創刊時(1987年)から現在までを振り返って~

もくじ

- おかげさまで100号を迎えました!
- 新聞報道から
- 少子化、離婚の盲点～『産後クライシス』を読んで
- これからを生きる女性に伝えたいこと ～働きつづけて見えてきたもの～ を聞いて
- 編集後記
- インフォメーション

これからを生きる女性に伝えたいこと ～働きつつづけて見えてきたもの～ を聞いて

1月14日、市役所の会議室に70名足らずの小さな集まりでしたが、藤沢市女性学習グループ連絡会・藤沢市生涯学習総務課主催の女性グループ学習活動振興事業学習会に行ってきました。

元NHKアナウンサー、山根基世さんの講演でした。昭和46年にNHK入社、その後、新人時代の経験や、多くの担当番組でかかわった思い出などから、働く女性の歩む多くの辛さ、厳しさ、そして喜びとともに、アナウンサーとしてばかりではない多くの活躍の場面のお話を語っていただきました。

昭和46年といえば、まだ男女雇用機会均等などという法律どころか言葉すらない時代です。野球中継などスポーツ番組の実習といえば、女性は別行動と、球場に連れて行ってもらえもしなかったそうです。ご自身も、それを当たり前のこととして受け止めていました。今では、多くの女性アナたちがニュースを読み、スポーツ実況もしています。

山根さんの沢山の活躍の場のなかに、平成19年に立ち上げた、子どもたちの言葉を育てる会、“ことばの杜”での活動があります。

5人のアナウンサーのお仲間と、絵本の読み語り、朗読会を開きました。読み聞かせではありません。朗読とは、音に出して読むだけの意味の“音読”ではないのです。声に出して読みますが、書いてあることの意味をしっかりつかんで、読んで、伝えて、相手の心に入っていくことが大切な課題なのです。

現代の子どもたちは、言葉の力が欠落しています。自分の気持ちを言葉で表現できない。

コミュニケーションがとれない。だから暴力に訴えてしまう。言葉は鏡です。「ばか、ウザい」とののしれば、相手からもそれしか戻ってこないのです。

子どもたちは固有の設計図を心に持っています。大人はそれにスイッチを入れてあげる。音声言語の伝達(絵本の読み語り)とともに大事なのは話し言葉の育成です。学校では、パブリックスピーチを教えます。それは対立関係のときの相手に対応するための言葉です。もうひとつは報告のためのレポートです。しかし、日常の言葉は教えません。

ケの日(普段の日)、となりの人と心を通わせる言葉を伝えたい。しかし、普段つかう言葉を学ぶ場が今の時代はなくなったのです。核家族で育つ、母と子との会話しか経験しない。地域でのつながりもない。地域では立場の違う人との会話があります。それを学ぶために大人と子ども、いろいろな人々との交わりのある地域づくりが必要です。山根さんは地域でのいろいろな行事を大事にしたいと力強く語りました。

すぐに結果の出る教育ではありません。でもいつか人生を築く力を育てることになると信じて活動を続けられるとのことでした。

他にも多くの有意義なお話がありました。“男は察しない動物”というの楽しい指摘でした。男女ともに是非、口に声に出して意見を言い、伝え合い、理解し合ひましょう。

(甘粕 記)

- 春の季語。朧月、菜の花、八十八夜、茶摘、雛祭、こどもの頃の歌がかかれています。まだ少し寒いけど。(甘粕)
- たまには雪も良いが、先日の雪は、小田急線藤沢・片瀬江ノ島間を半日止めた。陸の孤島のようなであった。(大山)
- 4年間、編集員として、原稿締め切りに慌てながらも楽しく取材・執筆できました。しばらくナゾの海外特派員として、地球の裏側から「かがやけ地球」を見守っていきます。(佐野)
- ソチ五輪。史上最年少と最年長のメダリストにワクワク。レジェンドと一度呼ばれてみたい私です(笑)。(有田)
- エコカー、携帯端末…私たちの暮らしは27年前の想像を超えた便利さだ。男女平等もあの頃想像した姿になっているだろうか。(川辺)

インフォメーション

共に生きるフォーラム ふじさわ2014 実行委員の募集

人権男女共同参画課では、毎年秋(11月頃)に男女共同参画について認識を深める講演会「共に生きるフォーラムふじさわ」を開催しています。

公募等の市民委員が中心となって開催し、今年で25回目を迎えます。

実行委員にぜひご応募ください。また、講演会のテーマも募集いたします。こんな話が聞きたいというものがありましたら人権男女共同参画課までお寄せください。



任 期：5月下旬から2015年2月下旬(予定)

対象・人員：市内在住・在勤の方若干名

申込み方法：4月18日(金)までに、任意の用紙に

- ①住所 ②氏名(フリガナ)
- ③年齢 ④性別 ⑤職業 ⑥電話番号
- ⑦応募動機(400字程度)を書いて、郵送(必着)又は持参で。

申込み先：〒251-8601 藤沢市朝日町1番地の1
人権男女共同参画課 ☎0466-25-1111(代表)

能力を発揮していきいきと働くために!

平成25年に実施した男女共同参画に関する市民意識調査では、「自らの能力を発揮していきいきと働くためには、どのようなことが必要だと思いますか」という設問に対し、一番多かった答えが「出産、育児、介護休暇を男女とも取りやすくする」、2番目が「労働時間を短くするなど調整して、男性も女性も地域や家庭とのかかわりができるようにする」という結果になりました。また、ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)に組織全体として取り組んでいる企業は労働生産性が高いという研究結果も出ています。必要に応じて育児・介護休暇を取得し、労働時間ではなく成果を重視することにより、男女それぞれが能力を発揮していきいきと働くことができる社会は、労働者にとっても経営者にとっても良い結果をもたらします。ワーク・ライフ・バランスを職場や家庭で考えてみませんか?

みんなでなくそう!ハラスメント

様々な場所でのいやがらせが社会的な問題として顕在化してきています。市民意識調査でもセクシャル・ハラスメントやパワー・ハラスメントを受けたことがあるとの回答が1割前後ありました。自分では意識していなくても、相手はいやな思いをすることもあります。まずは自分の行動を見つめ直し、様々な場所で、お互いに話し合うことから始めましょう。

キモチを伝えるデザインあります

チラシ・パンフレット・広報紙・HP・ショップカード・名刺・のぼり・クリアフォルダ・はっぴ・オリジナルグッズ・オリジナルキャラクターの制作、イベント企画など

株湘南よみうり新聞社 ☎0466-50-5088
お気軽にお問合せください。info@shonan-yomiuri.co.jp

お見積
無料

かがやけ地球は、市民の編集員さんの
企画・運営によって、年4回発行しています。

編集スタッフ 川辺 裕子・佐野 美穂子・大山 賢一
甘粕 保子・有田 留美子

ご意見・ご感想・今後扱って欲しいテーマなどをお待ちしております!

FAX 0466-24-5928
E-mail jinkendanjyo@city.fujisawa.kanagawa.jp

古書・アウトレット本 買取と販売

ご不要なもの、お売りください。※一部、買取れない品もあります。
買取(買取品目)書籍・CD・DVD・ゲームソフトなど
お売りいただく際は身分証明書のご提示をお願いいたします。

お買得 稀少 アウトレット本と古書の販売 詳しくは下記ホームページで
発売後、読者の手に渡らず出版社に在庫されていた未読の本(アウトレット本)を旧定価の20~80%OFFで販売します。他に珍品や稀少本など古書も扱っています。

藤沢駅(南口)前・有隣堂藤沢店5階
リブックス藤沢店 ReBOOKS 有隣堂
☎0466-26-1411(有隣堂藤沢店代表番号) ●ホームページ http://www.yurindo.co.jp/

毎月1回! 中庭/ハセの木広場ステージにて 楽しいイベント開催中!

藤沢駅直結

6F ギャラリー 6F イベントホール 6F Aホール 6F Bホール

7F Cホール 7F Aホール 7F Bホール

フジサワ名店ビルでは、様々な貸ホール・ギャラリーを提供しております。教室の開催や展示会、講演などに、どうぞお気軽にご利用くださいませ。

空き状況は下記WEBサイトより確認いただけます。

フジサワ名店ビル
☎0120-111-391 営業時間:10時~21時 〒251-0055 藤沢市南藤沢2番1-1号
☎0466-23-0111(他) www.fujisawa-meiten.com

かがやけ地球 おかげさまで100号を迎えました!

1987年 「かがやけ地球」タイトルから

70年代、日本にウーマンリブが、アメリカからファッションと一緒に持ち込まれた。まだ中学生だったので、何だか怖かったのを覚えている。

就活をしている時、大学に来た求人募集は男性・女性別々だった。女子の就職は本当に少なかった。親に「短大に行けばよかった。」と言われてショックだった。(1977年頃)

ユニバーサルデザインという概念は1980年代に誕生したようです。

1987年 婦人問題情報紙「かがやけ地球」創刊(年2回)

「婦人問題情報紙」というように、この頃は「婦人」という言葉を使うことが多かった。その後「女性」という言葉が多く使われるようになった。

男女雇用機会均等法が施行(1986年)された直後の気合が感じられます。

1988年 女性議員が8名誕生(第2号)

1990年 「ふじさわ女性行動計画」策定 女性問題情報紙「かがやけ地球」(年4回) に変更(第7号)

1991年 「日本女性会議'91 ふじさわ開催」(第12号)



1992年 「育児休業、介護休業等育児又は 家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」 (育児・介護休業法)施行

1つ2つ上の先輩は憧れの企業に就職していくなか、バブルが崩壊し女子総合職の採用ゼロの企業が続出。就職活動には苦労しました。

1993年 中学校家庭科男女必修開始 「女性教育長の誕生」～県内初!(第19号)

次女の幼稚園では、家庭科を履修したお父さんがちらほら。イクメン度が高い気がします。家庭科男女必修の効果かも!

家庭科の授業が男女一緒に行われていたのを、子どもが中学生になって(2010年頃)初めて知った。

1994年 高校家庭科男女必修開始 「『看護師』をめざして」～市立看護専門 学校に初めて男性が入学(第23号)

女性も男性も、性別に関係なく道を切り開くことはカッコいい! 20年経った今、もっと男性看護師が増えてほしいと感じます。

現在、横浜市のある病院では、深夜に病棟で作業しているのをみると、5人で作業をすれば、1人は、男性というような割合になっていた。男性の「看護師」は増えている。医師は、見た感じだと約3割が女性だった。

「ワーク・ライフ・バランス」の考え方は90年代に生まれたようです。

1995年 「お父さんと一緒～パパも子育てしようよ」 ～初めて子どもをもつ男性のための 「父親入門教室」開催(第30号)

いわゆる「父親学級」でしようか? 意外と歴史は浅いんですね。



出産後1年間、勤務時間中に午前30分、午後30分授乳のため仕事場からスクーターで保育園に通った。(1996年～1997年)

1997年 「かがやけ地球」市民編集員による発行開始 「藤沢市初の女性消防士」(第35号)

97号でも「活躍する女性」というテーマで、女性消防隊員を取り上げています。南消防署に取材に行きました。現在は、10名程度いるようです。

1998年 男女が共に生きる情報紙 「かがやけ地球」に変更(第39号)

子どもを産んでしばらく経った頃、男性で育休を取った人の本が出版されて話題になった。我が家でも、夫が職場初の育休が取れないか真剣に議論がかわされた。

今から、27年前に本紙「かがやけ地球」が産声を上げました。

私が学生の時は、男子は技術、女子は家庭という性別によって分かれていた教科は男子も家庭科必修になっていたり、男女別だった出席簿は男女混ざっていたり、気がつけばいつ変わったの?ということもあり、月日の流れ(歳をとったことも)を感じるこの頃。

編集委員自身が「あの時、私は何をして、何を思ったか」を織り交ぜながら、「かがやけ地球」の歴史を振り返ってみました。

1999年 「男女共同参画社会基本法が施行されました!」(第44号)

子どもが幼稚園に通っていた頃、男性の幼稚園の先生がいなかった。園長先生は女性だった。

2000年 「ストーカー行為等の規制等に関する法律」施行

2001年 「ふじさわ男女共同参画プラン2010」策定
「DV防止法が施行されます」(第50号)

2002年 市内小・中・養護学校で男女混合名簿化

私が子どものときは、もちろん男女別の名簿でしたが、今の子どもたちには男女混合は自然なことですよ。

2005年 「ちっちゃな、みんなの、たからもの
～次世代育成支援
対策推進法が
施行されて～」
(第66号)



2006年 「ユニバーサルデザインから始まる
男女共同参画社会」(第68号)

2007年 「寝たきりでも家庭療養できます…
ちょっと発想の転換を!」(第73号)

2008年 「あなたは、自分らしく生きていますか?」
ワーク・ライフ・バランス特集(第78号)

仕事と家事、育児どれも大事なことで、どれか取捨選択しなければならないのではなく、各家庭や個人が状況に応じてバランスを変えていくことが重要。ワーク・ライフ・バランス。まさに的を射た言葉だと思いました。

子どもが小学校を卒業する時、校長先生が女性だった。

イラスト：内閣府ホームページ「カエルジャパン」キャンペーンより

2009年 「～若者達は、今～」デートDV特集(第80号)

編集委員になるまで知らなかったデートDVの問題。知れば知るほど、未成年からデートDVについての知識を持たせなくてはいけないと感じました。

女性が運転するタクシーに初めて乗った。まだまだ、女性の運転手さんは珍しかった。

2010年 「私たちの藤沢 健康都市宣言」(第86号)

この頃から「イクメン」という言葉が使われるように…

藤沢でバスに乗ったら、女性の運転手さんだった。今でも女性のバスの運転手さんは珍しい。

2011年 「ふじさわ男女共同参画プラン2020」策定

子どもが通っていた中学校に校長として女性が赴任した。(2012年4月)

2013年 「Building back the better community!
災害の前にあった社会よりも、良い社会を
めざして復興しよう」(第96号)

家族の入院中、病棟の看護師さんは今でも圧倒的に女性が多かった。男性は数えるほどしかいなかった。(2014年)



創刊当初は、「婦人問題情報紙」「女性問題情報紙」というサブタイトルから分かるように、女性の社会的差別をなくそうと、女性が問題提起し、女性がアクションを起こすという動きでした。しかし、近年、女性の社会進出や雇用機会を増やすためには、家庭科男女必修に代表されるように、子どものうちから「男だから女だから」で分けずに学べる環境、父親教室や男性の育児休暇など、男性が子育てしやすい、家事にかかわりやすい機会を作ろうという動きになってきたようです。

この「かがやけ地球」の編集チームでも、2年前から市民編集員にも男性が、歴代女性であった担当には、昨年春から初の男性職員が加わるようになりました。「そうですか、なるほど」としばし熱くなる編集会議での意見交換に耳を傾けてくれる男性職員、今までの女性オンリーだった編集委員とまた違った切り口で記事を書いてくれる男性編集員。「みんなちがって、みんないい」という有名な詩のフレーズのように、性別、世代、職業にかかわらず、みんなが歩み寄り、寄り添い、助け合える社会になるといいですね。もちろん、私たち編集委員も、「かがやける地球」目指して(は大きすぎる夢?)、読者の皆さまに役に立つ情報を発信できるよう、これからも頑張っていきます。

(大山・川辺・佐野 記)

新聞報道から

アベノミクスを強化するための成長戦略改定のための検討方針案が明らかになった。ここでは「女性が輝く日本の実現」を掲げている。そして、女性の活用に積極的な企業を補助金の交付先選んで優遇するとしている。また、役員や管理職への女性の登用目標を設けるように促すという。

こうしたこともあって、新聞では「女性登用」について色々取り上げられている。

『毎日新聞』1月1日付は、1面分を使って「経済飛躍 女性登用が鍵」という特集を行った。ここでは、活躍する3人の女性役員の体験談を取り上げている。

野村ホールディングス執行役員の中川順子さんは、夫の香港赴任に伴い退職したが、帰国後復帰し、執行役員になっている。日本マクドナルド執行役員の鳥淵美夏子さんは、アルバイトから執行役員になった。ダイヤ精機社長の諏訪貴子さん

は、父親の後を継ぎ、町工場を大胆に社内改革して、注目されている。

3人に共通しているのは、初めから役員になるとは思ってもしなかったことである。最初は、アルバイトであったり、二代目社長になるとは考えてもいなかった。あるいは、一度退職するとそれっきりになってしまうというのが、世の常なのに、復帰して「出世」して役員になったり。それぞれ、女性として役員になったことで、能力を活用し、活躍しているとして、注目されている。そこには、ベテラン社員から反発されながらも、大いに改革を進めてきたという実績に裏付けられたものがあるからであろう。

(大山 記)

少子化、離婚の盲点～『産後クライシス』を読んで

婚活という言葉でさえ、まだなじめないような気がしているのに、最近では「妊活」という言葉まで出てきてとまどう。就活で就職しなくてはと焦るように、とにかく妊娠しなくてはということなのだろう。無理もない。晩婚化によって不妊、さらには卵子の老化ということさえ言われたりしているのだから。とにかく妊娠・出産というと、幸せな面ばかりが強調されがちだ。私も待望の赤ちゃんを授かったとわかった時、バラ色のような日々がやって来るだろうと思い描いていた。しかし待っていたのは苦しいつわり。しんどい妊娠中。恐ろしく痛い出産。辛い産後の体。さらには赤ちゃんと2人きりで来る日も来る日も続く授乳とオムツ換えと睡眠不足との戦い。慣れない育児に、とてつもない不安と孤独。自分だけが暗いトンネルの中にいるような気がしたものだ。

この『産後クライシス』は、文字通り産後の危機のことで、NHK総合「あさいち」でとりあげて大反響を呼んだ特集が書籍化されたものである。従来、産後の危機といえば、産後うつや、マタニティブルー、虐待といった母子関係ばかりが問題とされてきた。この産後クライシスは「出産から子どもが2歳くらいまでの間に、夫婦の愛情が冷え込む現象」を指し、夫婦や社会の問題として提起している。子どもが生まれても、夫が家事・



『産後クライシス』
著者：内田明香・坪井健人
ポプラ新書

育児もせず、妻を思いやることもなく、妻の愛が冷めていくのである。

全国で起きている離婚件数は年間23万件。そのうちのおよそ3万9千件は子どもが0～2歳の時に起きているという計算になるそうだ。もちろん離婚の原因が産後クライシスによるものかどうかは断定できない。だが、産後クライシスがあれば第2子が産まれる確率は低くなるので、少子化に直結していることは間違いない。離婚まで至らなくても、その後遺症が夫婦関係に深い溝を残す場合が少なくないという。うちにはもう関係ないと言いきれるだろうか。

共働き家庭が増え、時代が大きく変化した今、産後の母親だけを支援するのではなく、夫を父親として成長させ、よりよい夫婦関係が築けるようなサポートが必要だということをこの本は示唆してくれる。

(有田 記)